

北海道師範塾  
「教師の道」

塾頭通信

第547号 平成25年5月23日

## 千年の愉楽

「千年の愉楽」は、小説家中上健次の代表作の一つで、それが、若松孝二監督の手によって映像化され、現在劇場公開されています。

若松監督は翌年の公開を控えた2012年10月、交通事故によって突然亡くなった為、「千年の愉楽」は若松監督の遺作となりました。

若松監督は、映画「千年の愉楽」について、「人は、生まれて、死んで、また生まれて、死んでいく。その営みの繰り返しだ。人が人を差別するこの社会の中に、次々生まれては死んでいく。余りにも不条理で、だけど、だからこそ、中上が思わず文章で描かずにはいられなかった美しさがあり、僕がその文章に触発されて作った映像がある」と述べています。

私にとって、原作の「千年の愉楽」はいささか難解だったこともあり、若松監督による今回の映画は、どうしても見て置きたいという衝動に駆られました。

「千年の愉楽」は、中本の血に繋がる6人の男達の壮絶な生きざまと死を「オリュウノオバ」の目を通して描いたものです。

舞台は紀州の「路地」といわれる被差別部落で、目には見えぬ壁で仕切られた世界に生まれ、育った若者達の葛藤と挫折（といてしまっは表層的かも知れませんが）を描いています。そして、この路地でただ一人の産婆で、この土地の全ての嬰兒を母体から取り上げた「オリュウノオバ」は、彼等の生き様と滅びを見続けています。

「千年の愉楽」に登場する中本一統の6人の男達は、さながら貴人のごとき男ぶりで、性的魅力にも溢れています。彼等は、その性的な魅力によって女達に愉楽を与えながら、我が身は破滅への道に踏み込んで行きます。それは、彼等の中に流れている「高貴でしかし穢れている」中本一統の血のなせる技ともいえます。彼等は、その事に恐れを抱きながら、しかし、中本一統の血の呪縛から逃れる事が出来ないのです。

半蔵が自分の女房が身ごもった時、「オリュウノオバ」に「かんまんかいね。アレなんにも知らんけど、弦みたいなの生まれへんかいね」と語り掛ける場面があります。この「弦」は障がい者で、彼の左手には指がなく、ただ獣のひづめのように二つに裂けているというのですが、半蔵は、中本一統の血を受け継ぐ我が子も同じような障がいを持って生まれるのではないかという恐れを抱いています。これに対して「オリュウノオバ」は「弦は仏様やのに。仏様がそうそう生まれてくれるもんか」

と半ば怒るように答えます（「半蔵の鳥」から）。

映画では、女に腹を刺され薄汚い小屋の中で横たわっている彦之助が、様子を見に来た「オリュウノオバ」の夫「礼如」に、苦痛に耐えながら、「女に腹を刺された時、中本の、遠い祖先の罪背負うて、人知れず、浮島の森で、時を待てという声を聞いた」と、声を絞り出すように語る場面（「浮島の森」から）があります。

「高貴で穢れた血」は、半蔵や彦之助達の様に「路地」という社会から疎外され中で生きざるを得なかった人達の頸木となっています。

原作では、「路地はオリュウノオバが耳にただけも何百年もの昔から、今も昔も市内を大きく断ち割る形で臥している蛇とも龍とも見えるという山を背にして、そこがまるでこの狭い城下町に出来たもう一つの国のように、他所との境界は仕切られてきた。路地の言葉が地外の言葉と違うのも祖先が殿様に連れられてアキノクニから来たともイズモノクニから来たとも言い伝えられていたからその何百年もの昔の言葉の訛りが今に残っているのだとオリュウノオバは考え、その昔、船に乗って徒で歩く祖先の姿を思い浮かべた（「六道の辻」から）、という一節が出て来ます。

「高貴で穢れた血」というのは、「路地」に住む者達を言葉も違えば血も違うという、異形の存在として差別する道具立てとなっており、しかも、半蔵や彦之助達は自分達への差別を受容する原理ともなっている事は、悲劇です。

人が人を差別するという問題は世界の至る所にありますが、我が国においても、被差別部落の問題は誠に根が深いものがあります。1871年（明治4年）8月にいわゆる「身分解放令」が発布され、それまでの被差別賤民はその身分から解放される事になりました。しかし、いくら制度としての身分制は無くなり「四民平等」の世の中になったとはいえ、被差別部落出身者に対する差別はその後も無くなっていません。

「明治の御代を迎えてよ 四民平等の声聞いて・・・」という唄は、映画の中で流された島唄の一節です。身分が解放され四民平等になったはずなのに、まともな教育受けられなかった為に万歳という字も分からず、その後も、虐げられ、差別されていく人々の姿を描いています。

**明治の御代を迎えてよ**

**四民平等の声聞いて**

**万歳という字を知らず**

**意味も分からぬ者ながら**

**バンバイ バンバイと叫んだが**

**磯打たれて 火を放たれて**

**槍で突かれて捨てられた**

映画は、「オリュウノオバ」の死と「夜明けの花の窟」に響き渡る赤ん坊の産声が重なり合う映像でラストを迎えます。それは、人間の生まれては死んでいく営みの象徴といえます。

「オリュウノオバ」の死は、「路地」の代弁者が消えて行く事を表していますが、それは、現実世界から「路地」が消えてなくなった事を意味している訳ではありません。「夜明けの花の窟」に響き渡る赤ん坊の産声は、今もなお、日本のどこかで、いわれなき差別が行われている事の警鐘のように聞こえます。（塾頭：吉田 洋一）